

# 「風葉和歌集」桂切の新出「源氏物語」歌について

——付「風葉和歌集」に用いられた「源氏物語」本文考察——

米田明美

一

「風葉和歌集」は、文永八年（一二七二）十月、後醍醐院皇  
后であった大宮院の命によって選進された、平安時代から鎌倉  
時代初期までの物語中の和歌を集めた物語歌撰集である。勅撰  
和歌集の形式に倣い、巻頭に序文を載せ、部立に分け詞書を付  
し歌を配している。序文の記載により元々は全二十巻であった  
と推察されるが、現存本はいずれも末尾二巻を欠き、他にも巻  
十三・十四に合わせて約五十首ほどの脱落があると考えられ  
る。現在残された総歌数は千四百十八首で、元来は千五百六十  
〜七十首程度と推定されている。だが、『増訂 校本風葉和歌

集』出版の後も、桂切と称される「風葉和歌集」の断簡が発見  
されており、今後不明であった散逸部分が埋まる可能性が大い  
に期待されている。

この度、『古筆学大成二十三』（小松茂美氏編 一九九二年  
講談社）に所載されている「源氏物語和歌切」の中の一葉が、  
実は「風葉和歌集」桂切であり、現存部にはない歌であること  
が判明したのでここに紹介したい。これで「風葉和歌集」の総  
歌数は千四百二十首となり、収載された「源氏物語」歌は巢守  
の巻の歌を含め百八十二首となる。

こといきてきてすまにうつろはせ給はん  
としけるにおほろ月よの尚侍につか  
はされける

## 六条院の御歌

あふせなき涙のかはにしつ見しや  
なかるゝみをのはしめなるしむ(らむか)

御かへし

なみたかはうかふみなわもきえぬへし

なかれてのちのせをまたすて

おとゝひ侍ける女のおとゝにかよひはへり

『古筆学大成二十三』によると個人所蔵の断簡で、伝後伏見天皇筆と伝えられているが、その真筆ではなく十四世紀初めの書写とする。「風葉和歌集」桂切は、伝後伏見天皇筆と極められることが多い。桂切は、その名から桂宮家に伝来していたと推測され、現在甲・乙・丙の三種が知れるが、この歌が現存諸本にない歌であることから、甲本の可能性が強い。

最初の九行は「源氏物語」須磨の巻の内容で、源氏が須磨へ

旅立ちの準備をする一方、朧月夜尚侍に贈った文の歌とその返歌である。この贈答歌の後の「おととひ」は、次に位置する別の物語歌の詞書の一部である。残念ながらこれだけでは、その内容や物語名を知ることができない。

この断簡が、「風葉和歌集」のどの部分に属していたかであるが、物語場面に縛られずこの詞書・歌だけを考慮すると、二人の仲が「こといできて」の理由で別れねばならなくなった折の歌、或いは歌中の「流るる身をの始め」から疎遠となり始めた折の歌とも解釈できよう。そう考えると可能性のあるのは、卷十三(恋三部)に存する大脱落の箇所ではないだろうか。恋三部の配列は、恋の成就した恋二部巻末を受け、巻頭は行末変わらぬことを誓うものの次第に不安が募り、相手を頼みとしてつその心の変化を嘆く歌の後、約四十首の大脱落となっている。大脱落の後は、相手を恨み嘆く歌となっており、その間に位置していたのではないだろうか。誰もが知っている光源氏の須磨行きであるが、詞書に「こといできて」とその理由をはぐらかし、二人の仲になにか事件があった印象をあたえているのも背けよう。ただ「風葉和歌集」は、卷十三だけでなく末尾二巻も散逸している。卷二十は長歌であったと推定されるが、卷十九

は雑歌に当たり、どのような内容の歌が置かれていたか推定できない故、この断簡を卷十三の歌と断定することはできない。

三

この「源氏物語」歌で問題となるのは、六条院(光源氏)詠の第五句である。「なるしむ」或いは「なるらむ」と読め、『源氏物語大成』ではこの部分は青表紙系・河内本系・別本系一致して「なりけり」であり、この本文はいずれにも属さない独自の本文となる。桂切は、甲・乙・丙と同一人物の手による細かな訂正を重ねた三回の書写事情から、「風葉和歌集」の原本である蓋然性が高く、桂切の調査は、各物語がどのような本文を底本に使用したか、当時どのような本文が一般に流布していたかの基準となろう。「風葉和歌集」収掲の「源氏物語」本文に関しては、現存本にない果守の巻の四首を含むこともあり、青表紙本・河内本いずれにも属さない別本系統の古写本の一本に依拠しているとされる。今回見つかった二首を含め、改めて桂切より「源氏物語」の本文を確認してみたい。

桂切は、日本古典文学影印叢刊『物語二百番歌合・風葉和歌

集桂切』に収められており、その内「源氏物語」歌は十六首である。甲本九首、乙本十首でその中に重複歌三首がある。乙本の切れのなかには、果守の巻に存していたと考えられる一首が含まれている。「源氏物語大成」と比較し、相違のある歌三首を検討してみたい。

おほかたのあきのわかれもかなしきに  
ねなゝきそへそのへのまつむし(甲本―賢木の巻)

第四句―青表紙本系すべて「なくねなそへそ」

河内本系すべて「ねな鳴そへそ」

別本系―陽明家本・伝為相本・國冬本「ねなゝきそ  
えそ」

つれなさをむかしにこりぬこゝろこそ  
人のつらさにそへてつらけれ(乙本―朝顔の巻)

第四句―青表紙本系「人のつらきに」―為家本「人のつらさ

に」

河内本系すべて「人のつらきに」

別本系すべて「人のつらさに」

身のうさをなけくにあかてあくる夜は

とりかさねてそねもななかれける（乙本―帚木の巻）

第五句―青表紙本系・河内本系・別本系すべて「ねもなかれ

ける」

果守の巻の歌一首を除き、今回の二首を含め十七首となるが、その内須磨の巻の「あふせなき…」と帚木の巻の「身のうさを…」の二首は「風葉和歌集」独自本文である。賢木の巻の「おほかたの…」や朝顔の巻「つれなさを…」歌からは、青表紙系とは言えないと思われる。これらのことから、やはり青表紙系・河内本系いずれにも属さない別本系で、現在存しない古写本を底本にしているのであろう。

#### 四

この桂切「源氏物語」歌四首の内現存本に存する三首に関し

て、「風葉和歌集」の善本とされる宮内庁書陵部本や京大本、丹鶴本の三本ではどうなっているか見てみると、賢木の巻の「おほかたの…」は京大本のみが桂切と同じである。朝顔の巻の歌は三本とも「人のつらさに」で桂切と一致しているが、京大本は第五句「そへてくられ」である。しかし帚木の巻の歌は「ねもなかれける」と三本とも桂切の本文とは異なっており、また京大本は初句「身のうさを」である。仮に桂切が「風葉和歌集」の原本とすると、どこかの書写段階で一部手元の「源氏物語」本文に正された可能性があると言えよう。そう考えるとその他の現存の「風葉和歌集」所載の「源氏物語」歌が、すべて撰進時の「風葉和歌集」本文を正しく伝えているとは言えないであらう。

新発見の須磨の巻の「あふせなき…」歌は、第五句「なるらむ」となると、流され行く身の始まりなのでしょうかとさう意味になり、源氏の処置に対し、現存の「源氏物語」本文の「なりけり」より、わりきれない不審感がより強調されているような印象をうけよう。「風葉和歌集」所掲の「源氏物語」の本文は、果守の巻だけでなくその他の巻に関しても現存する「源氏物語」本文とは大きく異なっていると言えるのではないだろうか。更に多くの桂切の出現が願われてならない。

注1 中野莊次・藤井隆各氏校合・解説 昭和四十五年一月  
友山文庫。

注2 藤井隆氏 「『増訂 校本風葉和歌集』以後の桂切」  
『鈴木弘道教授退任記念 国文学論集』 昭和六十三年三月 和泉書院。

注3 藤井隆氏 「風葉和歌集の桂切」 昭和五十五年八月  
貴重本刊行会。

この新出の「風葉和歌集」桂切に関しては、その確認に際し  
関西大学の田中登先生にご助言を頂きました。田中登先生には、  
深謝申しあげます。